『ラーネッド博士伝—人と思想』

——書き終えて思う——

住谷悦治

大正十一（一九二二）年春四月、同志社大学法学部助手の職を得て京都に来た。幸い面接の時の教授たちの一人であった恒藤恭先生のお世話で、先生のお隣りの下鴨宮崎町、八田秀次郎氏方の二階の一室に下宿し、毎日法学部研究室へ通うことになった。そのころ、今出川通りには電車も通らず、道も補装されず、自動車なども通らず、気楽に通勤できた。風の吹く日は今出川通りは砂塵が舞い上がったので、ある先生は「今出川砂漠」などと呼んでいた。同志社のキャンパスが東に尽きるところに板塀と門があって、木戸のような門に「ラルネデ」と片仮名で書いた標札がとりつけてあった。たぶん同志社の宣教師であろうくらいに考えていたし、どのような先生だかお目にかかったこともなかった。

五月のある夜、先輩の石田秀一郎教授（経済史）と、この四月新任の能勢克男（民法）教授とわたくしの三人が海老名総長に招待されて一夕の歓をつくしたが、その時、総長夫人が横井小楠の令嬢であることや、ラルネデ先生は神学部の教授で、特長のある偉い先生であることを教えられた。日本人が先生をラーネッド Learned 先生と呼んでも通じないので、わざわざラルネデと門標に書いて、そのように呼ばせていたとのことであった。

ある時の集会に、海老名総長のほか同志社の有力な幹部、老先輩、三学部のおもだった教授二、三十名が集まった席上、中瀬古六郎博士が一人の老外人の傍らの席からこのアメリカの宣教師がラーネッド先生という偉い先生だと紹介し、博士を通じて皆のものが日本語でスピーチをして欲しいと要望した。皆のものは喜んで拍手し、先生は静かに立ってスピーチをされたが、はじめてのわたくしにはほとんど言葉が通じなかった。あとで日本語であることを知らされたが、先生は日本語、漢語に精通し、日本語で立派な著書を書いているが、発音は不慣れの日本人にはよく通じないのだとのことであった。中瀬古博士のラーネッド先生紹介は実にすばらしいもので、その時の紹介の言葉は後ほど文字になったが、つぎのようなものであった。

「同志社の初期に於ては、智育、情育、意育の三大薫育は三人の偉大なる人格者に依って代表せられてをった観がある。即ち新島先生は渾身是れ意志の人であって、其の徹底せる意志が即ち同志社そのものの意志であり、此の意志に依って同志社の趣旨、目的、方針、経綸が統一せられたのである。先生の歌が之を示して居る。

石鐵も透れかしとて一すぢに
射る矢にこむる真丈夫の意地

デビス先生に至っては、満身是れ火、是れ熱、是れ情の人であった。彼れが一朝義憤を懐き、劔を提げて起ったのは、彼れの奴隷

解放の南北戦争の時であった。後年彼れが同志社の時局に深憂を抱くや、終夜祈りては泣き、泣きては祈り、朝起きたときには、枕頭熱涙にズブ濡れとなって居ること、一再にあらざりしと云うではないか。東洋的の語を以て之を云えば、デビス先生の眼に輝くは、一滴の紅涙にはあらで、真に滂沱として流るる萬斛（こく）の熱涙であった。

デビス先生を以て熱情の権化であり、疾風迅雷であり、狂瀾怒濤でありとすれば、吾がラーネッド先生は、泰然として動かざる山である。雨降らば降れ、風吹かば吹け、ラーネッド先生こそは千秋万古、高く塵界を抜いて雲外に静立する大岳秀嶺である。過去五十五年、同志社の歴史には、波瀾重疊、紛糾錯綜、校難踵を接して至れることも頻々であったが、此の間独り、ラーネッド先生のみは、深く同志社の使命を信じ、天佑の常に此の校の上にあるを念じ、敢て騒がず、敢て狼狽せず、唯孜々吃々として聖典の註釈と神学の講義とに没頭して、泣かず、哀まず、悠々として光明の雲間に漏れ出るを待たれたのである。

私は又一面よりラーネッド老先生を思うと、彼海遠く沖合の波間に陰顕する巨巌の如き感じがする。疾風叫び、怒濤の狂える時は、見えないが、波静まり風和げる後から見れば、依然として元の所に崇高なる存在を示現するのである。抑も是れは何故であるか。思うに先生の崇高なる性格の後ろには二個の厳然たる背景がある。其の一は彼れが壮時教養を受けたる母校イエール大学の偉大なる学風の感化である。彼れの如く八十歳の高齢に至るまで、日夕母校を念じ、其の精神を体験し、其興隆を希願する人は、世に稀れであると思う。

彼れが性格の第二の背景は、彼れの祖先の遺伝である。彼れが名は、Dwight Whitney Learnedであるが、其の一方の祖Dwight家では連綿たる神学者の血統にして、其の先をジョナサン・エドワーズに興し、ヅワイト氏に至っては、父、子、孫の三代相継いでイエール大学総長たりしことがある（㊟先生の父、ロバート・シー・ラーネッドはエール大学卒業生で牧師であった。母はセラ・ホイットニーという有名なホイットニー家の出である——筆者）。一方の祖ホイットニー家もまた米国有数の地質学者、博言学者を出した（㊟博言学の大家ホイットニー博士はラーネッド博士の伯父であるという——筆者）。米国最高の山岳は実に其の名によりて Mount Whitney と名づけられて居るのである。其の他十九世紀の終りに於て世界有数の公法学者の称ありたるウールセイ Theodore D. Woolsey 博士も亦実にラーネッド博士の伯父である（㊟ウールセイ博士の名著 "Political Science or State"——筆者）。

宣なるかな、ラーネッド先生が吾人の為めに同志社初代史に於て、実に其の智的表徴として崩然持立せられたるや！ 嗚呼意志の化身デビス先生は遠く既に亡し。情の化身新島先生も亦已に世を逝せらる。而して今や吾校理智の権化たるラーネッド先生又特に吾等の間を去られんとす。今三伏の盛夏なりと雖も身辺豈秋風粛篠の感なきを得んや」と。

わたくしをして、ラーネッド博士の人物に深く傾倒せしめたのは、まさに中瀬古博士の教えによるものであった。わたくしは、ラーネッド博士について、神学部の芦田慶治先生をはじめ、当時御在世の東京霊南坂教会の小崎弘道先生、早稲田大学教授の浮田和民博士、大阪教会の宮川経輝先生などに直接書簡を拝呈して、ラーネッド博士について、昔の講義に関

して教えを乞うた。ラーネッド博士の名著、「経済新論」（宮川経輝訳、明治十九年刊）や「経済学之原理」（浮田和民訳、明治二十四年刊）をはじめ、初期の経済学講義案である明治十二年の「経済学略説」（七一雑報、横井時雄訳）、同じく「貨幣論」や同志社第一回の卒業生でその年同志社教師となった森田久万人の「ラーネッド博士の経済学、政治学の講義ノート」、さらに図書館の雑書の中に発見した“Economics and Politics”という未発表の講義案等を手にすることができた。

とくに、ラーネッド先生が昭和三年にアメリカン・ボードとの契約により五十年の同志社教師としての責任を完全に果たし、渡日後五十三年目に帰米される前、先生を邸に訪ね当時の講義案を見せられ、講義案の順序についても直接親い得た。これらのことは、わたくしが昭和八年夏、やむを得ずして同志社を去った翌年公刊した「日本経済学史の一齣」の中に詳細に叙述した。

ラーネッド博士は神学部教授であり、もちろん、専門は教会史と聖書神学であったが、初期においては、担当された学科は、キリスト教会史、教理史、聖書神学、新約聖書、ギリシャ語、ラテン語、さらに経済学、政治学、物理学、算術、高等数学等々兵式体操まで教授されたという。まさに万有学者としての学識をフルに発揮せざるを得ないような同志社の教学状態であった。幸いにして先生の深遠・広大の学識はよくその任に適合され得たといえよう。わたくしはラーネッド先生の経済学と政治学以外は知らない。この部面は先生の同志社における本命ではなかった。しかし、事実は何よりの明かな証明となるが、経済学、政治学の体系も内容は、当時日本の明治十年代の如何なる斯学の文献・著書に比較しても著しく優秀であり、断然と学問的な光りを輝かしていることは、ここに一々その事実の比較を開陳しえないが、初期の明治政治史、経済学史を知る学者は必ずやこのことを素直に承認するであろうと信じている。わたくしは、このことを学界に顕揚したいと思った。拙著「日本経済学史の一齣」と、先年公刊した小著「日本経済学の源流――ラーネッド博士の人と思想」は、ラーネッド博士の思想への手懸りになると思っている。さらにラーネッド博士の人物、学者としてのすばらしさ、人間としての崇高な人柄、名利に超然とした恬淡たる態度、人に接して春風のごとく、自ら秋霜をもって粛する厳しさは、典型的な基督者といえるであろう。

わたくしは、ラーネッド博士を知れる初期の同志社人の書き遺してくれたラーネッド人物観を集め、同時に、つとめてラーネッド先生ご自身によって、みずからの信念を語る文献を探した。過日渡米のさいは、アメリカにおける博士の最後までの愛弟子内田堯先輩を訪ねて教えを受け、多くの記念の写真を与えられ、博士終焉の地ピルグリム・プレースに遺邸を見学し、博士晩年の生活を熟知するデフォレスト博士（ミセス・デフォレスト先生）を訪ね晩年のご生活を記録し、ラーネッド博士への思慕と尊敬とを深めることができた。

わたくし自身は、同志社に職を得てほとんど生涯の大部分を生きたことを感謝するとともに、ラーネッド博士のような先生について何ごとか触れることのできたことを生涯の喜びとする。ラーネッド博士のような立派な学者、崇高な人格者が同志社におられたということも知らず、縁あって同志社に来たわたくしは、人生の出合いの神秘さをさえ感ぜざるを得ないのである。

（同志社総長）

新島襄展に寄せて

――各方面への感謝をこめて――

同志社社史史料編集所

財団法人博物館明治村から、その評議員をしておられる工学部山田忠男教授を通じて新島襄展を明治村で開くについて打診があったのは、昨秋もおそいころで、秦前理事長御在世の折だった。理事会も大いに結構ではないかということで明治村へ同志社の意を伝え、当編集所としてもさっそくその準備にとりかかった訳である。

ところで、明治村は五月上旬恒例として大規模な茶会を行ない、その節明治の先覚者の人となりと業績をしのんで行なう顕彰展を開催し、福沢諭吉展、大隈重信展がすでに行なわれた。今回の新島襄展は過去二回と同じく明治村三重県庁舎二階特別展示室にて五月十日より五月三十一日まで開かれた（茶会は十・十一日の両日）。この期間中展覧会場には約十万の人が訪れ、一点一点に見入る人が実に多かった。

大規模な新島襄記念展は戦前は措いて、戦後は同志社創立九十周年記念時にあったのみであり、二十日間以上にわたるものは初めてのことであろう。急ぎ、展観に耐えられないほどいたみのひどい軸、額の補修、さらに未表装の新島遺品の表装の手配にかかったりした。遺品の刀を自ら平民と名乗った新島襄の心と対比して出品するには研（と）がねばならず、費用の点で困っていたが、これは校友で刀に御造詣の深い新井重熙氏が正月以来心をこめて研ぎにかかってくださり、拵の補修、白鞘の作成も含めてきわめて廉価に四月下旬にはみごとに仕上げていただけた。銹のひどかった河内守藤原国助造　笹丸雪と銘文のある一刀は寛文新刀で逸品であり、貴重であることを御教示いただいた。いろいろありがたいことであった。全予定出品物の写真撮影、パネルにするものの選定については、寒中火の気のない遺品庫の中でのＡＢＣ写真店土方氏の労を多とせねばならぬ。良心碑は展示に欠かせぬものとして白黒写真ながら大パネルを展示し得た。このようにして展示品目が最終的に決定してその目録を明治村へお渡しできたのは四月中旬、事実の正確を期して少しずつ書きためていた解説の方は四月下旬であった。実際に作成した説明書は大きくアレンジしたものである。新島襄肖像（伊藤画伯筆、中学チャペル内）の額縁については、校友、河原町三条の京美堂さんのお世話になったりした。

さて明治村では毎月八ページぐらいの「明治村通信」を出しておられるが、今回の新島襄展のためにその記念号をということで、執筆陣について明治村から依頼があり、そこで新島襄の多方面の活躍を浮き彫りにしていただくべく各方面の方々にお願いした。「明治村通信」編集部の方でも何人かの執筆者を依頼され、谷川徹三明治村茶会々長の御挨拶、住谷悦治同志社総長の一文と相まって、実に破格、二十ページのみごとな記念号を作成していただいたのである。幸いなことである。

展覧会場で、新島襄にちなんだものを希望者に頒布する計画は大学の計らいでその手持の「寒梅之詩」複製四百本を当てることができた。他に伝記類も明治村の格別の

（61頁へ）